遊びにおいで

T.Wlin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊びにおいで

【Ｎコード】
Ｎ９０４９Ｌ

【作者名】
Ｔ．Ｗｌｉｎ

【あらすじ】
ナルニアからロンドンへと医者としての勉強に来ていた”一の王”ですが、ナルニアとロンドンを行き来できるようになったがゆえの”壁”を感じることに・・・

―僕は
君が行きたかった国の
王様なんだよ―

僕は、今ロンドンで医学を
勉強している。
たっての願いを
その世界の東の主に願い出て。

「最新の技術を駆使してとまでは
いわなくても、この世界で
救える命は救いたい。
僕の手で、人の手で」

そういったとき、
それもよいだろうと、
彼は静かに承諾してくれた。

そうして、今ここで学ぶべきことを
学ぶ。

いつも上手くいくわけでもなく、
指導教授にみっちり叱責されることも
ある。
逆に、よくやったと肩をたたかれる
こともある。
胸のポケットの手帳に、

ひとつずつ教授の判が押されると
ホッとしたような、
少しだけ誇らしい気持ちになる。

でも、それはいくら“誇り”があっても
そうもいかないことだった。

担当科でもない、小児科の患者、
メアリー・ミルドレッドという
やけに肌の白い女の子がいた。

彼女は、ある日、僕の白衣の裾を
つかんで言った。

「ねえ、先生。
ナルニアって国、知ってる？」

僕はがっちりとそこで
固まった。

言うまでもない、
僕はそのナルニアの“一の王”だから。

「どうしたの？」

彼女の手が重く引くような
気がした。

“いいかい、ピーター。
ロンドンで学ぶことには異はない。

しかし、しかるべきとき、しかるべき場所に
来るべきではない者に、
君は存在しない者だということを
忘れないように“

固い約束だった。

「め、メアリー、それって
どんな国なんだい？」

子供の絵空事話を聞くようにたずねた。
メアリーは、にっこり笑って、
“僕が知っている以上に”

ナルニアのことを語ってくれた。

やけに、懐かしくなった。

弱って、もうそのうちに、そんなことも
語れなくなるであろうこの子に、
ナルニアを見せてあげたい気持ちになった。

でも、それはできないこと。

“しかるべきとき”でもなければ、
“しかるべき場所に来るべき者”でもないから。

「ありがとう、メアリー。
ナルニアに行くには、元気にならなくっちゃ」

「うん。いっぱいご飯食べて、
いっぱい歩く練習して、行くの！
ナルニアへ」

信じて疑わない真心。
僕も持っている、今でも。

だから、真のナルニアで、
“一の王”として生きている。
弟妹や、ナルニアの仲間たち。
泣いて、笑って、けんかも、
戦いもして・・・
大事な人と恋をしている。

“君も遊びにおいで”

そう言えたらよかった。

そう言えない僕に、
今は医者の“誇り”は
薄いクモの糸がかかっただけの
ようだった。

半月後、夏休みを迎えるにあたって、
僕は一度ナルニアに帰ることに
なった。

朝教授に挨拶して、
病院を去るとき、
主のいなくなった小さなベッドを、

きれいにしているのを見かけた。
メアリーの病室だった。
僕はしばし足を止めた。
白く空虚になった部屋に、
色はない。

ナルニアに咲く花々を、
白いところがないくらい、
飾ってやりたい気持ちになった。

ああ、帰ろう。
ナルニアへ。

「ねぇ、ピーター」
ルーシィーが、うっつらしていた
僕の前で、手をかざして
反応をみていた。
「なんだい、ルー」
「せっかく、ロンドンから戻ってきたのに、
疲れてるみたいね」
僕は苦笑した。
「お仕事、エドマンドに
押し付けちゃって、
休んじゃってもいいんじゃない」
「そうは、いかないよ。
そうでなくても、エドマンドの
機嫌が悪くなる」
ルーシィーは、くすくすと笑った。

「ねえ、ルー」
「なあに」
「ひとつお願いがあるんだ」
「どんなこと」
「クッキーをかごいっぱい焼いてくれないかな」
「あんまり上手にできないかも」
「いいよ。ルーが作ってくれるお菓子は、
元気になれるから」
「わかったわ！早速作りに行って来るわね」
たっと、椅子を降りて駆けていく
ルーシィーが、とても頼もしく思えた。

緑の小高い丘の上。
何人もたどり着けぬようで、
望めばたどり着くような場所。
この世をあまねく見渡すライオンの王は、
さきほどからヒョイっと器用に口に
クッキーを運んでいる。
「少し上手になったのかな？」
僕もそう思うよとうなづいて一つつまんだ。
「ピーター、君のろんどんの小さな友達は、
来ると思うかね」
「・・・ええ、来ると思いますよ。
スーザンのときみたいに、
かなりゆっくりかもしれないし」
ゆっくりとうなづくと豊かなたてがみが揺れる。
アスランの鼻先がふいにピスっと鳴って、
風が遠くから揺らいで来た。

「風の流れが変わったな」

小さな足音が風音に混じっているような気がした。

「ようこそ、ナルニアへ。
遊びに来てくれたんだね」

僕は見えぬ風先にクッキーがいっぱい詰まった
かごを差し出した。

真っ白で小さい指が届いたような気がした。

（後書き）

【萌えカス】

移動中にふと思いついたネタで
ございます（驚愕）
ピーターたちは、本当に運よくナルニアに
到達してますが、
なんかのはずみでナルニアを知り、
行きたいと願っても行けない人も
いるんじゃないかと
思って書いてみました。
中には大人になりすぎて忘れちゃう、
そういう人が大半でしょうけど、
忘れない子供のうちに、
行きたくても行けないという、
現実もあると思っての
作です。
私も行きたいんですけどね、
たぶん
“しかるべき”状態では、
ないからでしょうね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9049l/

遊びにおいで

2010年10月9日23時26分発行